

ψ
ψ
ψ
ψ
ψ
ψ
ψ
ψ
ψ

第31号

執筆者

@短信

朴 希沙(Kisa Paku) 新連載

今号より連載させていただくことになりました。以前、編集長にお声かけいただいた時には、「今書けること、なんにもない…」と思い、静かに過ごしていました。

ところが最近、「マイクロ・アグレッションについて書いてみたい！」という思いがむくむくと湧き、密かに情熱を燃やしています。マイクロ・アグレッションとは聞きなれない言葉だし、意味も分かりづらいですが、少しずつ紹介していけたらと思っています。よろしくをお願いします。

三浦 恵子 連載第二回

数年来苦しんでいた頸椎の疾病が、実はかなり難しいものだという確定診断の告知を、12回目の異動の後、ある大学病院で受けるという経験をしたことがある。異動のたびに主治医を転々とし、東日本大震災の復興対応などの忙しさを理由に対処療法で凌いでいたことが災いした。痛みを伴う疾患だったが、認知行動療法を応用しながら痛みをコントロールし、頸椎カラーや杖などの装具を活用しながら、日常生活も業務も遠距離介護さえもできている(と思い込んでいた)だけに、ショックは隠せなかった。

ただちに疾病に特化した治療を受けることになったが進捗ははかばかしくなかった。治療か仕事かの二者択一を迫られる場

面もあった。ただ、セカンドオピニオンを受けてでも仕事を続けるよう励ましてくれた職場や同僚、家族のおかげで、新しい療法にトライする機会に恵まれた。その際従事していたのが、今回連載で書かせて頂いた更生保護ボランティアの方々との協働に関する業務だった。地域社会のなかに溶け込んで活躍されるボランティアの方々と共に動く時には、その心意気や熱意が体に染み渡るように感じる事が少なからずあった。そして「なんとか病気をねじ伏せてもどのようにばりばり仕事をしたい。」という焦りが、「更生保護ボランティアの方々がこんなに熱心してくださっているのだから、私も良質の仕事をしたい。」という思いに変わっていった。奉職当時の原点に立ち戻ったような気がした。新しい治療を開始して半年、気が付くと痛みから開放され、装具や杖を少しずつ外せるようになった。アドラーの「勇気は伝染する」という言葉を実感した経験だった。

川本 静香 連載第二回

つい1週間前、出張で札幌に行ってきたのですが、ちょうど寒波が到来しており、路面が凍ってツルツルでした。そんなことになっているとはつゆ知らず、関西からいつものパンプスを履いていってしまったがために、何度も転び、アザをつくる体たらく。最終的に、訪問先の先生からタクシー移動を進められる始末でした。北国の11月を舐めてはいけなかったと、心の底から反省しています。

飯田奈美子 連載第二回

我が家には3歳の娘がいます。親に似ず？人見知りをしない性格で誰にでも話しかけます。駅に向かう道中でもすれ違う人、全員に挨拶をして、落ちている枯葉をプレゼント。そして自慢げに指を3本立てて、3歳アピールをします。それを見た通りすがりの人(主に女性)は、「まあ、3歳なのにしっかりして、お利口さんね」とほめてくださいます。世渡り上手の娘に関心させられる日々です。

山口洋典

デンマークの北、オールボーで暮らして

8ヶ月が過ぎました。いよいよ8時になっても薄暗く、15時台には日が落ちる季節となりました。日本で柚子湯のニュースが流れるであろう12月20日の冬至には日の出が8時57分、日の入りは15時39分と予測されています。夏の日を懐かしむ今日この頃です。

もっぱら、オールボー大学のPBLに関心を向けていますが、11月の初旬、これまたデンマーク発祥という「Art of Hosting」の合宿研修に参加してきました。直訳すれば、おもてなしの術、となるのですが、参加型リーダーシップの観点として位置づけられています。いかに他者や社会と丁寧に関わり合っていくか、対話の知恵を学んできました。次年度の授業科目の準備も徐々に進めなければならず、平等や民主主義が重視される中で培われた多彩な実践を活かしていこうと息巻いています。(写真、「8つの呼吸」と題した場のマネジメントの概念を体感的に学ぶワークの一場面)



寺田 宏志

最近、アマゾンプライムで「メンタリスト」というテレビドラマシリーズをよく観ます。メンタリスト＝人の心を読み取ったり、あやつったりする人らしいです。

そんな簡単に犯人がわかるわけなからうと思いつつ、ついつい観てしまいます。このドラマの脚本家こそが、メンタリストであるようです。

私の視聴行動がどんなふうにあやつられているのかを考えながら観るのも、また一興です。

関谷 啓子

最近、寝る前の読書が辛くなってきた。加えて読むスピードも落ちてきている。悪い病気が、、、？と眼科で精密検査を受けても異常なし。

医師はお年ですからねえ〜と常套句。70年近く生きてくるとメンテの足りない身体はこんなものかなあと諦め気味の日は続いていてある日。

ホスピスボランティアの若い仲間が「一緒にアロママッサージを習いに行こう」と誘ってくれた。エエツ、今更、、、と思いつつ台風の中、完全武装で習いに行った。生徒4人に講師ひとり、講義とかなりハードな実習を終日受けた。

講座終了時、講師は「頭で理解したことを実際に行う事で身体に覚え込ませるように。今夜から始めてください。相手のいない人は犬でも猫でも結構。とにかく回数をこなせ」と檄を飛ばす。

帰宅後、早速、豆柴をひっくり返し、マッサージを試みるも、直ぐに逃げられ、引っかかれ敢えなく断念。

それからは人と見れば事情を話し実験台になってもらっている。皆、表情が和らぎ、力が抜けていくのが感じられる。時々眠ってしまう人もあり、そんな時は嬉しくて仕方ない。人の体温を感じる安心感、触れられる心地良さ、手当てという言葉でこんなふうにして生まれたのかなあ〜と思う。

マッサージしている私も、心が落ちつき柔らかな心持ちになるのも嬉しい。病気で言葉を出せなくなった友人、高齢でほとんど眠ってばかりのように見えた人、彼女達を前に途方にくれていたが、今は自分に2本の手があったことに感謝している。そしてその事に気づかせてくれた若い仲間にも。

身体は昔と同じには動かないけれど、アンテナだけは磨いていたい。そして誰かが声をかけてくれたら、いつでもフットワーク軽く動けるように心がけておこう、、、と思っている。

と言うわけで、私のバッグにはいつものアロマオイルとタオルが入っている。出会う皆さん ご協力よろしくm(_ _)m。

＊

最近読んで面白かった本。目からウロコが3枚も落ちた。お勧めです。

「ほの暗い永久から出でて」(上橋菜穂子、津田篤太郎) 文藝春秋

単純な脳、複雑な「私」(池谷裕二)

講談社 y200 bluebacks



黒田 長宏

毎回同様なのですが、何しろ本文の婚活に精一杯なのと、今週はちょっとトラブル気味の事が幾つかあったものの、職場も特に変わったこともないし、(あったら大変なのだが)こちらが短い分、本文に回して下さい(笑)。(11/22)

鶴野祐介

「おでんの季節になりました。行きつけの食堂ではランチの定食におでんが一品付くのですが、どれにするかいつも迷います。大根、ロールキャベツ、巾着、卵、こんにゃく、豆腐、、、どれも美味そう。ついでに熱燗も注文したいところ、ぐっごらえる平日の昼下がりです。

臼井 正樹

今回から、この拙い文章を書くことにした個人的な理由を明らかにしたうえで、介護福祉の意義に迫っていくことにしたい。前回の短信にも記したが、介護福祉が単なる食事、入浴、排泄の介護ではなく、社会的支援を目指すものであるということ、さらには社会的支援の意味について考えていくための前段階として、今回はプライベートなことを中心に書かせていただいた。

山下桂永子

この原稿を書いているときに、臨床心理士の5年に1回の更新書類を準備していました。5年に1回が2回目ということは、気がつけば10年以上(社会人入試で入っているのも)もやっているこの仕事。そして町家合宿も11年。どちらもこんなに長くやれるとは正直思ってもいなかったことで

そしてこの対人援助マガジンも書かせ

ていただくことになり、ようやく1年経ちました。毎回言いたいことを後先考えずに書いているので、いつまで続くかわかりません。それでも毎回、書いてみて気づくことも多いので、これからも無理せず思いつままに書いていければと思っておりまので、読んでいただければ幸いです。

尾上明代

今回は、原稿提出をお休みさせていただきます。執筆時間は、ちゃんと今月の予定に入れていたのですが、先週はずっと親の看病で、今週は今度は自分が重い風邪にかかり、回復のために時間を費やすことになってしまいました。病気になることも食欲はあるはずの私が、何も食べたくなく・めずらしく熱も9度近くまで上がり、七転八倒(?)しておりました。そんな中、誕生日を迎え、友人たちのメールやプレゼントに元気づけられたのですが、驚いたのは、その日の担当の(母の)ヘルパーさんが、美しい花束を私にもってきて下さったことです。真っ赤なバラ、ピンクのカーネーション、かすみ草、そしてピンクのラッピングペーパーにピンクのリボン。私が大好きな色でまとめてあって、嬉しかった！さらには、すてきなバースデーカードが2枚も。1枚はご本人から、もう1枚は、私の母に、「明代さんにメッセージを書いてあげて」と渡して下さったカードでした。心のこもった「企画」に本当に感謝しました。・援助が援助を超える・いろんな意味で、親のヘルパーさんに助けられて、日々をこなしている私です。

今回は、編集長はじめ皆さまにご迷惑をおかけして申し訳ありませんが、よろしく願いいたします。

小池英梨子

カトリックの修道院から相談があった。シスターたちが畑にくるノラ猫を2匹可愛いがっていたものの、子どもをどんどん産んで、あっという間に8匹になり、室内に侵入してくるようになり困ってしまったそう。相談をくれた院長シスターは、修道院の中でも猫嫌いなどだが、状況を聞くために訪問すると「本当にありがとう引き取ってもらえて助かるわ。猫好きのシスターにも言ったの、小池さんに引き取ってもらうか

らって。泣いちゃうシスターまでいたのよ。」と。「はい?!」という気持ちを抑えつつ、引き取ることはできないこと、猫をどこかにやってしまうより、避妊去勢手術をしてここの畑を縄張りにもらった方がメリットが多いことなどを説明して、引き取らずに TNR (避妊去勢手術をして元の場所に戻すこと)をして、「修道院ねこ」として居着いてもらうことで納得してもらえた。涙ぐんでいる他のシスターには、引き取らないことと、避妊去勢手術をしたら院長シスター公認で餌をあげてもらっていいことを伝えて一段落。院長シスターも理解が早く、避妊去勢手術費は修道院が出してくれることに。「カトリックは動物の扱いがあまり良くない歴史を持つ宗教だと思っていたので、修道院が共生共存的な取り組みに合意してくれたのが嬉しい」と話したら、今のローマ教皇フランシスコが「回勅 ラウダート・シ」で地球は人権だけを考えてはいけない、動物や自然を尊重し共存していかなければいけないということが入った声明を出したらしい(全然読んでなかった)。それで、猫を雑に扱うと他のシスターが「ラウダート・シですよ!」と反論できるようになったそう。とっても嬉しい。



三野宏治

最近物忘れがひどい。20代や30代のころ、大人の人たちがご自分の年齢を「ええっと。今年は何年? 2017年? 1971年生まれだから、引き算してっと。今年46歳か」などと言うのをみて、嘘でしょとおもった。「そんな馬鹿な話はあるか。格好つけてるつもりかいな」などと訝しがってもみた。ただ、この年になって「いやいや、本当にわからんです。覚えてなどられないのです」とおもう。まず、自分の誕生日も知らぬ間に終わっている。もちろんケーキに年の数だけローソクを立てて火をつけ、吹き消す儀式もやらない。このセレモニーは何か願い事をしたあとに火を吹き消すらしい。願掛けみたいなものだろうか。

さらに、1日の多くの時間をモノを探すことにつかう。探しても見つけれないので、安いものなら買ってしまおう。そして新しいものを手に入れ、探し物をやめたとき見つかることもよくある話で。だから、職場にはホッチキスとか修正テープとかハサミなどが複数ある。

そしてこのたび、こともあろうに『対人援助学マガジン』第31号の締め切りを完全に忘れていた。これまで締め切りを過ぎ原稿を送付したことは、正直、少なくない。そのときは「ああ、締め切りが近づいている。今日が締め切りだ。過ぎてしまった。遅れましてすみません。原稿を送りますご査収ください」という按配だった。ただ、今回は違う。全く忘れていた。それをなぜか、シンポジウムの進行をしている時に思い出した。思い出したときは締め切りを過ぎていた。そして、あせりまくって書いた。書き終わって、自分の記憶力の衰えに呆然としている。

これからは今まで以上に手帳に書こう。そして確認しよう。もう来年の手帳は買った。手帳に書くことや確認すること自体は忘れないと思う。多分大丈夫だと思う。なんなら、誕生日ケーキにローソクをたくさん立てて「手帳に書くこととみる事を忘れませんように」と願掛けもする。ただし、誕生日を忘れていなければの話だが。そうだ、買ったばかりの手帳に自分の誕生日を書いておこう。

松村奈奈子

遅い夏休みをとって、夫婦で初秋に北海道の真ん中あたりの小さな町に行きました。

小さな町で何もしないで過ごす予定でしたが、近くに乗馬クラブがあったので、ふと乗馬してみよっかという事に。夫婦して初めての乗馬にチャレンジしてきました。いやー、馬はかわいいし、乗り心地も案外よくて、とっても気持ちよかったです。乗った馬は初心者私のいう事もちゃんとよくきいてくれて、ほんと楽しい1時間を過ごしました。夫婦でまた乗りたいねーと意見が一致。

帰りに、乗馬クラブの方が「この馬は、中央競馬で走れなくなった馬を引き取って、観光客の方でも乗れるように再調教している珍しい乗馬クラブなんですよ」「お客さんの乗った馬は、馬主さんや調教師さんに大事に大事にされてきたから、ほんと性格のいい子で、優しい子なんです」「きっとレースに負けても、また次があるよね、と優しく声かけてもらったんでしょね」と目を細めて話します。

さらに続けて「でもね、レースに負けたら馬主や調教師から、怒鳴られたり叩かれたり、虐待のような対応を受けた馬もいるんです」「その子らはほんとに、性格が悪くてひねくれて、再調教が難しく、お客さんを乗せることが出来ない馬もいるんです」「何年もこの仕事をしていると、わかるんです。馬たちがどんな風に育ててもらってきたかが」と悲しそうに話しました。夫婦して「うーむ」。

そして、私は心の中で、生まれ持って性格悪い子なんていないですよ。私も患者さんと話しているうちに、患者さんがどうやって育ってきたかが、なんとなくわかるような気がするんです・・・とつぶやきました。

後日、一口馬主をするくらい長年競馬にハマっている同僚に聞いてみたところ「虐待に近い対応をしている調教師がいるのは知っている」「だから、僕はそういうこの馬は買わない」と言います。そして「みな知っていて、そういう調教師はだんだん減ってきているよ」と聞いて、すこしほっとしたのです。

奥野景子

来年度から新しいことに挑戦することにした。あんまマッサージ指圧師の資格を取るべく、専門学校に通うことにした。「自分で何かコトを起こしてみたい」という考えがあったからだ。どうなるかはわからないけど、やってみないとわからないこともあるだろうと、やってみることにした。

だから、今年度で今の職場を辞めることにもした。色々と思うこともあったし、自分はそれで良いのか？と思う部分もなくはない。でも、今までを振り返るより、これからに向けて今の自分にできることをしてみようと思った。今の職場での残りの時間を、今の職場のこれからに向けてられたらと思っている。

10月から私の職場、渡辺西賀茂診療所にマガジン執筆者でもある清武システムズが入っている。10月から来年1月までの4か月、毎月1週間程度、滞在することになっている。彼がいると職場の雰囲気が変わる。雰囲気だけでなく、人の動きや会話、表情も変わる。私自身、今まではあまり接点がなかった人とちょっとした会話をする機会ができた、仕事以外のことを話し掛けられたりする機会が増えた。清武愛流という人物や私と彼の関係について聞かれることがほとんどだ。「今日は仕事こないの？」「今日も短パン履いてたね。寒くないのかな？」「ひげスゴイね」「大学院が一緒だったんでしょ？」など、本人に直接言えば良いのと思うことばかり。でも、会話の相手はだいたいニマニマしているから、それはそれで良いかと思っている。

私が、今の職場での残りの時間を今の職場のこれからに向けて出来たこと、大切だと思えることに気が付かせてもらった。ここからどうするかは、私次第なのだろう。でも、せつかく気が付けたことだから、気が付かせてもらったことだから、今の自分に出来ることをしっかりやってみたいと思っている。

柳 たかを

マンガ「東成区の昭和」を連載させて頂いています。この作品は以前、自分が設けていましたホームページに数年にわたって掲載したものです。

紙芝居好きだった私自身の子供の頃の思い出をベースに想像の糊でつないだストーリー四コママンガ。

今掲載の「ホイラン」は「東成区の昭和」を中断し、短期連載で掲載させていただきました。

トンボの中でもひととき大きく威風堂々としたオニヤンマをメスを囚にして採る遊びを、体験者である次兄から取材して描きおろしました。

「何を伝えたいと思って描いたのかな…」と、読み返しながらい思い出そうとしました。それは子供の頃は普通に持っていた(ワクワク感)ではなかったか…と。

私の場合、それはほぼ毎日夕方にやって来る紙芝居でした。



笑劇、怪談や妖怪物、冒険物。拍子木の音が遠くから聴こえてくると、やってることを放り出し、二階で筆を動かしている日本画家の父親に10円をもらい公園へ駆け出します。

走りながら、これから最高のエンターテインメントの時が始まる、ワクワクの期待感で全身に力がみなぎっていたことを覚えています。

気がつく(光陰矢のごとし)で、人生の残り時間を気にする年齢となってしまうましたが、でも、ワクワク感を失ってしまうと生きる力も衰えるように感じています。

過ぎたこと、先のこと、周りのことは気にせず、今自分の興味があることに集中して日々を送る姿勢って、大事ななあと改めて噛みしめる今の私です。

齋藤 清二

あつと言う間に秋も終わろうとしている。夏休みが終わったあたりで一時体調を崩して、ちょっと失いかけた自信がまた少し回復してきた。京都に来て3回目の秋であるが、温度差が比較的大きかったせいとか、ここ数年では一番紅葉が綺麗なようである。色々な話題がある中で、公認心理師制度がようやく正式にスタートしたことが比較的大きな出来事だろうか。臨床心理士と公認心理師の一番の違いは何かと言えば、前者は大学院から教育が始まるが、後者は学部から教育が始まるということである。学部における臨床心理学(対人援助的実践科学)教育とはどうあるべきか？というのが、私の最も大きな関心事である。米国の医学教育においてさえ、「最初の2年間で『人間はみな同じものである』』ということを徹底的にたたきこまれた後で、今度は突然『人間は一人ひとりが全く異なっている』』という事実直面させられるのだから学生もたいへん」というようなことが30年も前から言われてきたのであるから、ましてや日本の心理学領域ではどうなのかという、たぶん誰にも正解は見えていないのではないだろうかと思える。心理学と臨床心理学との関係は、「焼きそば」と「カップ焼きそば」の関係と相似形である、などとうっかり発言して響きをかたりしているが、まああまり深刻に考えなくても、時間がたてばそれなりになっていくのではないだろうか。現在学び始めている学生に10年後、20年後に学んでよかったと言ってもらえるような教育を今することが、最後のお勤めだろうと考えている今日この頃である。

石田佳子

今日ローカルバスに乗っていたら、停留所のないところで突然バスが止まりました。運転手はおもむろにバスから降りて道端の露店まで歩いて行き、食べ物を買ってゆっくりとバスに戻り、何もなかったようにまたバスを走らせました。その間(座席の7,8割が埋まる位)乗っていた人々に、動じる気配はまったくありませんでした。運転手がバスから降りて一服したり、窓から身を乗り出して知人と話し込んだり。。。

ここマレーシアでは、そんな光景が日常茶飯事だからです。

そもそも、バスも電車も時刻表通りには動きませんし、運転手が道を間違えて「いつものバスがいつもと違うルートを通る」こともあります。しかしその一方で、身体の不自由な人が乗り込むのを(乗客たちも文句を言わず)辛抱強く待っていたり、お願いすれば(運転手の機嫌が悪くなければ)停留所のないところで乗り降りさせてくれたりも。。。悪く言えば「いい加減」ですが、良く言えば「自己裁量の余地が大きい」のです。

バスに限らず、働く人を見ていると、日本との違いを痛感します。例えば、デパートの店員同士が顧客そっちのけでお喋りに興じていたり、小売店で店員がカウンターに食事を広げて食べていたり。。。日本では当然視されている「すばやく」「きちんと」「丁寧に」といった期待や要求、「それに応えねば」という使命感や緊張感が、すっぽりと抜け落ちているようです。

マレーシアの社会全体に漂う、この「ユルさ」や「テキトーさ」を、どう感じるか？こちらに移り住んだ当初は「あり得ない！」と驚き呆れて見ていた光景を、いつの間にやら「ま、こんなものでしょ」と受け入れて、「人間味はある」「楽しそうで羨ましい」と感じるようにさえなっていく……それが「慣れる」ということかもしれないと思う、昨今であります。

しすてむ♪きよたけ

最近、SMクラブの女王様の雑誌、プレイ撮影について行きました。具体的な仕事は言われていなかったけど、彼女が役に徹して華麗な演者になれるよう、彼女の理想とギャップを片手に、てれてれと付いて行きました。出版社からは、「フェチ感が出るようにしたい」と。「何だソレ！」と良くわからなかったが、実現できるよう。

僕は、分からないけど、知りたくなる。知らなくてもいいけど、知ってより良い循環が起きて欲しいと思っていると気がつきました。なんとも、まあ～知らない世界だけど、それなりに面白く、しれ～っと過ごすことができました。

さてさて、そうはいえども、上手くいくことばかりではありません。フリーで仕事をし

ている中、どうもうまいかないことがあったり、うまくいったり…波瀾万丈です。まだまだ、経験浅きモノではありますが、目先の不運にあたふた、または、捕らわれてしまっていることも。でも、それでは、何も変わらない…。だから、一踏ん張りして行こう！言語化できるようになりたいと思った僕です。



ここから、清武システムズのサービスのメニューが生まれつつあります。

メニュー1.失敗はあるが、それを通した判断基準になる装置。何をもって成功とするかは不確定ですが、去ったあとに現場の人が自ら進んで動いていく傾向にあるので、2.今ある力を推す装置になっている。てへへ。

小林茂

日本の名だたる企業が経営判断を誤ったりしたあと、その後の対応のまずさが会社自体をなくしてしまうか、アジアの勢いのある国の企業に買いとられてしまうといったニュースをみます。それがこの頃、特に目立っているように感じます。

どこか、個々の問題というよりも同時代・同世代が育んできた体質のように感じられて、日本は同じ傾向の問題で軒並みダメになってしまうのではないかと悲観的になりそうです。

企業といえども、人の取り組みなので誤ることはあるものです。そのことが「ブランドイメージが傷つく」「株価が下がる」などの理由で隠蔽したり、初動を誤らせることになるのだなあと感じます。

問題が顕在化するまでは、私たちが「ま

さか、そんなことはないだろう」と事実を過小評価したり、直視しない傾向もあります。相手が有名であったり、老舗であったりすればするほど、この傾向があるのではないかと感じています。相手が強力であったり、巨大であれば、自浄する力が及ばない現実も垣間見ます。倫理はどうしたら養われるのか、養うことができるのか。そんなことを感じる昨今です。

<温泉紹介>

☆函館市・谷地頭温泉

場所：函館市谷地頭町20-7

TEL:0138-22-8371

営業時間：午前6:00～午後9:30。

第2・第4火曜日/元旦定休

谷地頭温泉は、函館山の麓にあります。

函館を代表する温泉のひとつです。

1953年に開業した函館市営谷地頭温泉が前身で、2013年に民営化されるとともに改装されたそうです。広々とした館内で、食事もでき、地元の方々がたくさん利用されていました。

市電の「谷地頭」電停から徒歩5分近く、無料駐車場もあり、アクセスしやすいです。

泉質：ナトリウム塩化物泉(中性高張性高温泉)

○露天風呂、○大浴場(高温湯 45度)、○超音波気泡風呂、○ジェット風呂、○寝湯、○水風呂、○サウナ

水野スウ

マガジン 31号の原稿を書き終えたので、前から行こうと思っていた場所に、あられとみぞれと北陸特有の冬かみなりの轟く、暗い空の下を出かけました。

その途中ではっと、今日が何の日だったか思い出した。週に一度わが家で「紅茶の時間」という場をはじめた日が、34年前のちょうど今日でした。はじめたころのように、今はちっともはやっていない場だけでも、それでも毎週誰かしらやってくる。

そういう生活リズムがもう当たり前になっていて、「紅茶」の誕生日をわざわざ思い出すまでもないってことに、ちっとも妙に感動しました。そうなんだねえ、すっかり暮らしの一部なんだねえ、と逆に確認できた気がして。

去年の夏からはじめた紅茶の時間内「草かふえ」タイムは、社会のこと、自由になんでもテーマにして語りあう時間。これから先の社会の、空がどんなに暗くなろうと、ヒョウやあられが降ろうと、この類の自由だけは決して手放したくないなあ、ってしみじみ思う、そんな紅茶誕生日でした。ちなみに来週の草かふえには、もと琉球朝日放送の報道局長さんがみえて、沖縄の話をしてくれることになっています。

中島弘美

大阪梅田で家族カウンセリングをしています。当オフィスに来所される方の最も多いご相談内容は、うつ状態です。年末を迎えるにあたり今年をふりかえてみると、相談に来られる方に特徴がみられました。

会社勤めの方の相談は、三十歳前後の人が多くです。彼らは最後の昭和生まれや平成元年生まれの人たちです。仕事もひととおりできるようになり、次の段階の仕事と結婚、家族などを視野に入れて暮らしていく時期にあたります。

もうひとつの特徴は、定年退職前の時期における相談です。退職後、再就職をどうするか、これまでの経験をどう活かすのが良いのかを模索します。このライフステージの変化とともに、同居する家族にも柔軟な対応が求められる時期です。

それぞれの節目に柔軟に対応ができるよう、不安定要素を把握し、今後何が必要であるかについて、家族とともに話し合いをしています。

藤信子

保健所の「難病患者の訪問カウンセリング」を引きうけて、気が付くと20年経っていた。そろそろ次の人にバトンタッチをしようと思っている。ただ、1回につき患者宅への移動等も含め、2時間は要する。現在行っている保健所は、高槻市保健所なので、京都の自宅から高槻に行くことも含めると、半日仕事になることが、年5回(これは保健所の予算の関係)しかないの、一つの仕事としては成り立たない。30年以上前に、文学部で臨床心理学を講義することになった時、コーチンの「現代臨床心理学」を手にして、「第5部 コミュニティ

心理学」の章は、私の実践には無いが大事なことだと思った。それからいつの間にか、この20年間、高齢者の地域ケア、災害支援者支援、難病の訪問カウンセリング、学生相談等、コミュニティ心理学の領域の仕事が増えてきた。これは本当は行政の心理士がする仕事なのだろうと、今頃気が付いた。公認心理師が誕生することになったが、このような分野で働く人が増えるといいなと思っている。

千葉晃央

仙台に住んでいた頃、家にはネコがいた。白い体だったので「ユキ」と名付けた。一緒に布団に入り寝たり、追いかけて遊んだりしたことを幼いながら覚えている。大阪に来て、捨て猫を拾い、クラスでどうするかを考える機会があった。かわいくて、かわいくてたまらず、数匹のうちの1匹を数日預かった。一緒にお風呂に入った。ミルクもあげた。体からノミが出てきて、びよーんと飛んだ。ノミを見たのは人生初めてだった。「家で飼うのは絶対無理だからね！」今でも母のヒステリックな反応を思い出す。それは当然だ、賃貸マンションでペット禁止だったからである。



ある日、秋田の祖父母宅に行くと、猫がいた。同じく一時的に祖父母が預かっていた。その頃になると、夏に秋田に帰ると私は必ず喘息発作に襲われた。詳しいアレルギーテストで明らかになったのは「ネコの毛」、「煙」が振り切れるほど反応する体になっていた(夏は煙が出る蚊取り線香、仏壇の線香、花火がつきもので苦しむことに…)。母方祖父母宅にはネコがある時期からいた。その時期はいけなくなった。現在も妹宅にはネコがいるからいけない。

ぶちやネコ。それが小さい時、一番一緒にいた「ぬいぐるみ」の名前。マガジン連

載中の小池さんが中心となって活動している「人とねことまるごと支援プロジェクト」では上記の理由から後方支援。ただこの肉体でなければ、ネコが飼いたい。

仙台から大阪に引っ越すとき、その引っ越しの日の少し前に「ユキ」は家から姿を消した。ネコのライフサイクル的には別の意味があるのかもしれないが、千葉家の物語としては引っ越すことをわかってたんだ! …となった。大阪に来て、しばらくすると家と家の間に潜むネコの姿を見つける。「あ、ユキちゃん！」特徴だった右目が茶色と左目が緑の瞳、真っ白な体! …でもそんなわけはない。けれども、もしかして…という子どもなりの思いで心を動かされたことを思い出す。その時見た家と家の間に潜む姿は今も忘れない。

高校生になり、地元を歩いていると捨て猫に出会う。ダンボールに一匹。ミャーミャー泣いている。たまたま、持ち帰る。案の定、私の体は喘息、目、鼻のかゆみ、腫れなどボロボロ…。でも、ミルクをあげる。家族に「どうするの!」と言われる。そして、やはり一緒に暮らすことはできない…。小学校のころ、ネコをクラスで自分たちが何とかしようとしたことを思い出す。その晩、小学校のところに夜中に置きに行った。翌日、子どもたちが見つけて、何とかしてくれないかと。ダンボールに入れて、置いた。「みゃー、みゃー」いって、出てくる。よちよち、びよんびよん、離れる私の後ろを必死に追いかけてくる。たまたま戻り、抱っこする。けれども何とか意を決し、もう一度ダンボールに入れて、すぐ原付でダッシュで離れる。今でもその時の自分の手に残る爪の感触は忘れない。

ネコは「別れ」を私に提示してきた。ネコが立ち去っていった…。大好きなネコの近くから、私は「別れ」なければならなかった。アレルギーのため触ることができないという「別れ」を継続しなければならなくなった。様々なパターンの「別れ」。ネコが好き。来世ではアレルギーにならず共に暮らしたい。ネコの周辺にいる人々を私はこんな経験を根底に持ち、眺めている。

中村正

数多くの事例に出会う。わたしの場合、多くは逸脱行動が対象なので司法制度や

行政措置にかかわる問題をもつ人たちや家族である。〇〇問題という断定がしにくい現実ばかりである。違法薬物使用、子ども虐待、老人虐待、ハラスメント、DV、ゴミ屋敷などのわかりやすい単語ではとうてい整理できない現実を生きている。紋切り型の思考では理解ができない。たとえば「電話番号を教えてください。」と聞くと、「夫婦ですが携帯を共有しています。」と返答があった。二人とも働いている。貧しいわけではない。もちろん一人ひとりがもてばよいということでもない。携帯電話でなくともよい。しかし何か奇妙である。つまりDVの夫婦としてみると、それはあまりにも一体性が強いことになり、相互の拘束なのか、妻の社会的コミュニケーションを阻害しようとしているのか、嫉妬の故なのかということを考える。暮らし方に即した関係性理解がある。微細な動き方に何かがある。知り合いの保護観察官が教えてくれた。満員電車のなかで目の動き方が異なる二種類の人があると。スリと痴漢だと。わたしはそれに加えて警察官も異なる動きをしているはずではないかと話した。三種類の人がいることになる。では多くの人はどんな目の動きなのだろうか。逸脱や問題は日常行動にそくして表現される。街の人びとの日常行動こそがいろんなことを教えてくれる。

牛若孝治

『『障害』を見るな！『人間』を見よ！』

先日、通勤途中に地下鉄の駅で出会った1人の男性。彼と話をしていたときのことである。「私、高校の教員してるんですけど、以前全盲の女の子を教えたことがあるんです。彼女は物覚えがよくて優秀でした。目が見えない人は、目で確かめることができない代わりに、記憶力がいいんですね。本当に凄い子でした」。彼は、唐突にそんなことを話し始めた。私は、彼の話に不快感を覚えたので、次のように反論した。「あなたのようなもの見方をしているとたいへん危険です。なぜなら、あなたは我々視覚障害のある人たちを一面的に捕らえているからです。たまたま彼女が物覚えがよくて優秀だっただけで、彼女を代表して視覚障害のある人を見た場合、たとえば次に会った視覚障害のある人

が、もし彼女より記憶力が悪くて優秀ではないとあなたが感じたとき、あなたは知らず知らずのうちに、前に出会った視覚障害のある彼女と、次に会った視覚障害のある人をついつい比べてしまうでしょう。それは、教員としてあってはならないことではないですか？それに、あなたは「凄い子だ」と言うけれど、何が、どこが凄いのですか？もしかして、あなたが凄いと評しているのは、たとえば普段から英語を話している人たちに対して凄いと言っているようなレベルのものではないのですか？要するに、私が言いたいのは、あなたが彼女に「凄い」と言っていることが、そのままあなた自身にある無自覚な差別意識につながるといことです。彼は、私の話をたじたじしながら聞いていた。私は、彼の背に向かって大声で言った。「『障害』を見るな！『人間』を見よ！」。

袴田洋子

父が認知症の診断を受けたのが、今年2月。実家の引越しが、7月。デイサービスに行き始めたのが、9月。着実に進行しているようで、母は苦勞しています。妄想があり、それを否定すると父は怒るので、大変です。ショートステイを利用した直後から、機嫌が悪いようです。でもショートステイは、定期的に利用しないと、介護者家族の身が持たない。父がおかしなことを言い始めた時、専門職の自分であっても泣きました。けれど、4人に一人が認知症になる時代。ま、86歳にもなれば、認知症にもなるでしょう。ただ、同居の介護者家族は、辛いですね。病気とわかっている、辛いでしょう。暴言暴力がなければ、まだいいのですがねえ…

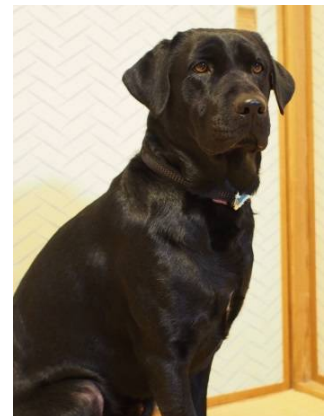
団遊

長く懇意にしている会社がM&Aを繰り返して、100社近い企業を束ねる会社になりました。これから効率化や合併でなくなる会社や部署も多いと思うので、「図鑑という形で足跡を残しておく」といのではないですか？」と話をしました。100社のうち、半分が国内の会社、半分が国外の会社です。下世話な話、お金もかなりかかるので、話のネタで終わると思っていたら、「それ、やりましょう！」と話が進展し、とりあ

えず今年国内をまとめることになり、今、言い出しっぱは日本中を旅しています。一日一社お話を聞きに行っても、50日かかります。もちろん聞くだけではなく、それを文字におこさないといけません。終わりの見えない戦いに心身ともに追い込まれ、今回連載はお休みさせていただきました。しかし、改めて名前しか知らない会社や、名前も知らなかった会社をめぐって思うことは、従業員4万人、グループ100社の気持ちを束ねられる可能性があるものは、理念やビジョンだなということです。性格も、これまでの歴史も、まったく違う会社が、ひとつのグループになる。そのダイナミックさと、率いることになった人たちの議論を見るにつけ、自分の仕事の向き合い方を考えさせられています。

大石仁美

今回もワンのお話を。なんと呑気な、と思われるでしょうけれど、動物と人とのふれあいは癒しの最良の薬だと思うのです。



このところ人間が生み出した物質による自然破壊が凄まじい。身の毛がよだつほどです。原発を筆頭に、排気ガスや農薬、自然分解されない洗剤、衣類、プラスチックから出来た食器やラップ、ペットボトル等々、人は便利さを求め、利益に心を奪われ、ともにこの地球で生きてきた他の動植物を踏みつけて、地球を破壊しながら生きているのです。いずれわが身に返ってくるというのに。海に漂うポリ袋をクラゲとまちがえて食べ、窒息してしまったウミガメの写真、釣り糸が絡まって、動けなくなった海鳥の写真、崩れ落ちる氷山に逃げ惑う白熊の映像…目を塞ぎたくなる情

報が多々発信されているのに、なぜか対策は遅々として進まない。一国の首相が、「なによりも経済優先！」と叫んでいるのが現状なのです。人は自らの傲慢さに気づき、同じ地球で暮らす他の生物たちに敬意を払う姿勢を忘れては平和はやってこないと思うのです。

さてうちのワンですが、2歳8か月。立派な大人になりました。親の欲目か、陽気で聡明、凛々しい立ち姿の男前。

私が朝起きて、洗面台に立つと「きゅ～ん、くう～ん」と小さな声で「ぼく、もう起てるよ」と朝の挨拶。洗面所の横の部屋が彼の居室。戸を開けると、じっと座ってこちらを見ている。

散歩の身支度をして、玄関に行き「ブライ、来い！」と声を掛けると、ダッシュとダッシュでやって来て、玄関のたたきで前足、後ろ足と伸び伸び体操。大きなあくびを一つして、それから散歩の出発です。最近の散歩は御所まで自転車で行き、松林の中を20分ほどウォーキング。トイレをすませて、自転車で少し遠回りして帰ってくるというのが日課です。朝早いので車が少なくとても快適。自転車との間隔も60センチほど開けて、横に並んで、まっすぐ走ってくれ、スピードを上げて付いて来てくれます。信号の手前になると、座って待ち、声を掛けるまでじっと待ってくれるおりこうさん。お散歩時間も、早く切り上げたいときは「今日は終わり、おしまい！」という、帰宅路の方に、方向転換。言葉をよく理解しています。

夕方は、可能な限り暗くなる前にお散歩。御所でほぼ同じ時間帯にやってくるワンちゃんたちと遊べるのが嬉しくてたまらないようで、大はしゃぎ。ボールを投げると、猛ダッシュで取りに行きます。他の子が取りにいけなくらい俊敏な動き。パネを効かせたその走りに、ついていけない子たちは半ばあきらめ顔。運よく自分の近くに転がってきたボールをくわえて「これ、ぼくのだ」と放してくれません。「ねえ、貸して！」「いやだ！」など、犬同士のやり取りもほほえましい限りです。

なんらかの都合でお友達が来ない日は、匂いを嗅いで、キョロキョロ探し回り、名残

惜しそうに、何度も後ろを振り返りながら帰路につきます。

人間より犬は犬同士がやはりいいんですね。

彼は言葉はしゃべれませんが、言いたいことがあると、鼻先で私の太ももあたりをツンツンとつつき、「ん？なあに？」と尋ねた時に、タオルをくわえたら、「かけっこして遊ぼう」軍手をくわえて来たなら「外に行きたい」舌なめずりしたら「おやつちょうだい」と、まあこんな感じで、簡単な意思の疎通が可能です。彼の得意技は、私の履いている靴下をそっと脱がすことと、仰向けに寝転んでボールで自分の背中をマッサージ。そのしぐさのなんと可愛いこと！

周囲を見渡せば、猫好き、虫好き(毛虫も含めて)、サボテン好き、……いろいろな人がいるけれど、特別な知識がなくても、この世の生き物、命あるすべての生き物をいとおしく思える環境とゆとりこそが平和への道。過酷な状況下で生きている人を思いつつ、ワンとの癒しの中で日々感じていることです。



ボールをくわえるブライアン

村本邦子

週1ペースの映画は崩れかけているが、平均するとまだ余裕がある。加えて、TVでも、この夏、NHKが良い番組をたくさん流していた。感心して見ていたら、その中でも戦後の傷痕を追う番組を制作してきた同世代の女性が会いに来てくれ、とても刺激を受けた。私も頑張らなくてはいけなくなり、緩みかけのネジを巻きつつある。

國友万裕

今度、従姉妹の息子が修学旅行で京都に来ます。面会の時間があるとのこと、京都に親戚等のいる人は会っても構わないらしく、会う予定となっています。お父さんのいない子なので、これまでもゲームを買ってあげたり、おもちゃを買ってあ

げたりしてきたのですが、今回は学校の用事でくるので、何か買ってあげることはできません。おそらく、どこかで食事でもご馳走するということになります。

僕もし家族を持つとしたら、男の子が欲しいと思っていました。僕自身が後悔多い少年時代を過ごしたので、自分の息子には幸せな少年期を過ごさせることでその埋め合わせをしたいという思いだったのです。その一方で、僕の血を引いたような子は学校でひどいじめを受けて悩み苦しむことにもなるだろうという心配があって、やはり自分の血を残す気にはなれなかったんですね。

なぜ、僕だけがこういう惨めな思いを味わざるをえなかったのか。50を過ぎた今でも、そのトラウマは消えることはありません。今でも修学旅行の生徒たちを見ると自分の悲しい少年期が思い出されて、切ない気持ちが湧き上がってきます。

でも、従姉妹の息子の前ではそんな態度はとっちゃいけない。父のない男子と子のない男。擬似親子関係を一時でも楽しく過ごそうと思っています。足長おじさんのような気分です。何をご馳走しようかなあー。中学生だから、洋食みたいなのが一番喜ぶでしょうねー楽しみです。

北村真也

(学びの森 <http://manabinomori.co.jp>)

京都府亀岡市で、新しい学び場として「探究スクール」「フリースクール」「ハイスクール」「ユーススクール」「放課後等デイサービス」を展開中。

古川秀明

台風というものは実に恐ろしいものでした。台風に限らず、自然の力は人間の想像をはるかに超えていることを頭では理解していますが、今回のように体験することも大切だなと思いました。大昔、星を頼りに航海にでた人々の勇気は凄いなと思います。もちろん、台風の海で犠牲になった人達もたくさんおられたのでしょう。今回の講演会&ライブも貴重な体験でした。長くなったので次回も続けたいと思います。

シンガーソングライター

西川友理

京都西山短期大学で保育士養成に、その他さまざまな形で福祉系専門職養成に関わっている者です。

昨年初めて、「ミニシアター まる」さんのひとり人形劇を拝見し、大変感動しました。「これをうちの学生に見せたいなあ！」

先日、その夢が叶いました。授業のゲストにお招きし、人形劇と紙芝居、それからミニレクチャーをしていただきました。

当初、プロの人形劇を見たからといって、うちの学校には人形劇の道具やセットはないんだし、直接学生の教育には関係ないんじゃないの、学校の予算を使うんだったら、もっと直接的に教育につながるようなゲストを呼んだ方がいいんじゃないの…という話もありました。私もほんの少しそう思っており、ゲストに誰を呼ぶかという話し合いの際にも「人形劇のヒトをゲストに呼んでもいいですかね…？」と少し躊躇していました。



しかし、子どもの前で紙芝居や手遊びをする保育者を養成する教育なんだから、共通する部分もあるだろう、子どもに何かを伝えるという意味では一緒だよ…ということでお呼びすることができることとなったのです。そしてこれが、本当に素晴らしかったのです！

まるさんは35年間、人形劇や紙芝居、腹話術などの講演を手掛けてこられた大ベテランの方ですが、大学での講演はこれが初めてとのこと。人形劇の講演の後には、ミニレクチャーの時間も設けていただけました。

「演じている最中にね、子どもは言葉にしないけど、子どもが楽しんでるっていうのは、何か伝わって来るんやよね。それに対してこちらからも返す、そしてそれにまた反応が返ってくる。それがね、たまらなく気持ちいいんです。これって、コミュニケーションなんです。」

授業後、学生の何人かが、私に、「先生が授業で言うことと同じことを言っていたねえ！」と言いに来ました。そうなんだよ、いい児童文化財には、コミュニケーションがあるんだよ！それが伝わったようで本当に嬉しい。

子どもにはもちろん、保育士をめざす学生達にも、そして現役保育士さんにこそ、いい児童文化財に、ほんものに触れる経験をしていただきたい、と強く思いました。

ミニシアターまる ホームページ
<http://www.marusanni.com/>

中村周平

実は、8月中頃から首を痛めてしまい、パソコンが上手く打てなくなってしまいました。これまで口で啜って打っていた方法が負担になっていたみたいです。現在、視線入力や音声認識を試している所です。本当に申し訳ないのですが、新しい方法に慣れるため、11月に送らせて頂くのを次回に延期させて頂くことになりました。今回は、短信のみで誠に申し訳ありません。次回に向けて、しっかり、治したいと思います。

坂口伊都

人生の所々に「あっ、そっか」と気づくことがある。父親と私は一緒に暮らしたことがなく、中学の時初めて父と食事をした。何の感動もなく、ピンとくることもなく、「勉強は何が好きか？」とかしか聞かれず、どっかの学校の先生と話しているようで居心地が悪かった。それから時々食事を共にしたが、苦痛でしかなかった。

社会人になって、苦手な上司がいた。厳しい人だった。その天敵上司との出張が決まり、気分が滅入った。怒られるのが嫌で、しっかりと商品の特徴を覚え、あれこれシュミレーションして仕事に臨んだ。すると、鬼瓦のような顔の上司が「良かったよ」と言ってくれた。それも、笑顔で。嬉しかった。

その後、父との食事で笑って話をしてみたら、父も嬉しそうに笑っていた。あっ、これで良いんだ。こんな簡単な事なんだ。なーんだと思った。今、里子との間でも同じような事が起きている。里子との出来事を話していると「傷つくな」と言われ、そっか

傷ついているんだな私と思い、いろいろな人が手を貸してくれる中で、自分が頑張らなくてもいいのか、一緒に育ててもらえばいいのかと気づいたら、身体が急に軽くなった。もっと早くに気づければいいのにとと思うが、そこは人生の機微ってやつなのかな。

河岸由里子(臨床心理士)

北海道 かうんせりんぐるうむ かかし 主宰

あつという間に年末。この時期はやることが一杯あって慌ただしく、あまり好きではない。クリスマスカードを書いて、海外の友人にカレンダーを送り、年賀状を注文し、印刷が出来たらさっさと住所を書く。大掃除の予定を立て、お節づくりの予定を立てる。仕事をしながらだから、日々時間が足りない状態になる。加えて雪があるために移動時間が夏場より多くかかる。あれこれ面倒だ。

そういえば、前回から今回までの間に、小学校のクラス会と、高校のクラス会があった。小学校はあるときから毎年やっているが、高校のクラス会の方は、ずっと参加できず、恐らく卒業以来初めてだったと思う。このクラスは高校1年と2年の1学期しか在籍していないが、みんな全く変わらず、気持ちよく話ができた。ただびっくりしたのは、細かいことまでよく覚えている人が多いこと。私は余り細かいことは覚えていないので、「そんなことあったっけ？」とか「そんなこと言った？」とかばかり。その記憶力、凄いなあと思う。言われて思い出したことも幾つかあった。少しは脳トレになったかも。

前回から今回までの目標とした4kg減量は、まだ達成できないが、少しは減ってきたのでこのまま減らしていこうと思う。そのために、年末掃除を頑張ろう！

岡崎正明

以前自動車の宣伝にもあったが、「馴染んでいく」という感覚はとても心地が良い。「馴染む」とは、相手が物であれ人であれ、「無意識的に対象との距離感が適度になる」ということだと思ふ。だからその瞬間に気づけることの方が少ないのだ。気がつけばいつの間にか「馴染んでいる」。そういうことのほうが多い。それがまれに

その瞬間に気づけると、なんだかとても気持ち良かったりする。

昔職場の近くにあったお好み焼き屋さん。店構えはちょっとオシャレ系で、店員もEXILE 風の若者が中心。おばちゃんがやってくる店じゃないので、世間話が深まる感じも、「いつものアレ」なんて符丁も生まれません。たまたま近いので行っていたお店だった。

ある時ふと、自分が馴染みになっている瞬間に気がついた。別に店員と笑顔で挨拶してきたわけではない。「ごちそうさま」と言って帰る際、それまで私の時にだけ、バイトがわざわざ小走りに来て、ドアを開けていたのに、それをしなくなったのだ。たったそれだけのことだったが、どことなく肩の力が抜ける空気が漂って、店を出て妙に嬉しくなった。互いの理解が、少しだけ深化した気がした。

最近幼馴染の友人と旅行したときも似たような発見があった。私はときどき派手にコケるのだが、そんなとき彼は横にいても全然助けないし、あまり驚かない。「おお」とだけ言って、横でボーっと待っている。私が立ち上がるのに自ら彼の手を掴むと、ようやくその時に引き上げるための力を入れる。私が再び歩き出すと、何事もなかったかのようにそれまでの会話を続ける。衆人の前でコケるのは恥ずかしいが、彼と一緒にその被害が最小限で済む。あまりにナチュラルで気がつかなかったのだが、私にとって一番楽な対応を彼は体得していた。

別に話し合ったわけでもないのに、なんだか示し合わせたように相手の望んだ態度がとれるようになる。互いの扱い方をなんとなく理解する。「馴染む」とは「＝相互理解」ってことなのかもしれない。

見野 大介

気づけば世間はクリスマスモード。1年が過ぎるのが早すぎる感覚です。今年はあまりにも出展し過ぎたので、来年はもう少し出展回数を減らして制作時間を増やすようにと考えております。あんなデザインやこんなデザインと、作り込みたいデザインも溜まっているのもありますので。ここ最近、急激に白髪が増えたなあと思う今日この頃。

浦田雅夫

9月に不死身だと思っていた母が亡くなりました。やはり人は死ぬのですね。でも、ゆっくりと最期の時間をあなたといっしょにすごせてよかったです。ありがとう。

団士郎

幸せなことに、世の中の人々が誰も自分の価値を分かってくれないと思った記憶がない。公務員組織にいた頃にはうっすらと、自分のことを受け止める仕組みが役所組織にはないのかと思ったことはあった。しかし思いつく仕事やプランはどんどんやっしまえば通用したし、公務員だからと自主規制する事もなかった。

むしろどこかで、自分のようなものがあると、バランスのいい公務員として頑張っている人達の目障りかもしれないとは思っていた。

早期退職要項だったかに応募して、十年前倒しの定年退職をし、満期退職の人達と一緒にパーティに同席した時のことだ。大きなテーブルに十数名の退職者と、顔も見ることがなかった本庁部長クラスが一名ずつ着席した。型通りの会話が進む中、十才も若い私は異分子だった。

そして話が回ってきた時、「退職後は何をなさるのか？」と部長から質問があった。転職が決まっていたわけでも、自営で何か始める準備をしていたわけでもなかった私は、「漫画を描いていたり、文章をかいたりしていますので、本を作ろうかと・・・」と話した。

「ホーッ」とテーブル全体が戸惑った。そして部長が、「著述業ですか・・・」とあきれたようにつぶやいた。たしかにあの時点で単著一冊も出版されてはいなかった。

あれから二十年経った。今、単著、共著、専門分野、マンガ、どちらでもないものなど、著書が20冊を超えた。

だからって印税で食べられるなんて事は全くない。ただ、自分の本が出たら嬉しいと願ったことが実現した。このことは私が世の中を信頼するために、大いに貢献してくれた。

*

悠々自適を信じられる人の精神が分か

らない。そんな風に生きた日本人の歴史を知っているのだろうか？

預貯金や財産が、戦争でみんなパーになった祖父母世代。私の祖父は若い頃からコツコツ貯めていた貯金が、戦後、たばこ数箱しか買えなかったと語っていた。(真偽の程は知らない)

突然の被災で何もかも失った人が沢山ある東日本大震災。そんな声をたくさん知っている。

年金がずっと支払われるとか、会社がずっと存続するとか、自分だけには不運は起きないとか、どうしてそんな危なかったことを信じたがるのだろうか。

はっきりしているのは、自分が働こうとしている限り、働ける仕事はあるということだ。雇用や賃金だけで仕事を考えるから、駆け引きや損得勘定に絡め取られるのだ。



自分で生きて、食べていくのだ。出し抜いたり、他人を食い物にしなくても、自分の役割を果たしていたら、「食うな！」といわれることなどない。

似合わない悠々自適にあこがれ、新しく登場する詐欺に引っかかるのは、自分の今を肯定しきれないからだ。

この世界を信頼しないで、自分だけ健康で長生きしようなどと、どうして思えるのか。預金額や資産運用話に引きずられていく自分を愚かしく思わないのか？

超高齢社会が駆け足で近づいている。その世界をどんなものにするかは、高齢者が考えなければならぬ。その住人が自分で考えないで、他人の子や外国人の世話になろうなんて、虫が良すぎるだろう。

そんな歴史がかつてどこに展開したというのか？ありもしない幻の老人ユートピ

アに裏切られたと不安がるより、出来ることを自分がすれば良い。

やれば出来ることがあるのに、何もしようとしていない人など、誰も助けないだろう。そんなものは福祉でも権利でもない。自己中心、思い上がりというものだ。

もう十分働かせていただきました、などと口幅ったいことを言うものではない。まだまだ現役。高齢化社会とはそういうことだ。

大谷多加志

つい先日、職場で企画と進行を担当している「治療教育講座」という講座の、今年度の予定が全て完了しました。「治療教育」という、最近では耳慣れない言葉が使われていますが、発達支援の現場で仕事をすすめる上で、必要になる「発達の基礎知識」や「発達支援の視点やアプローチ」を学ぶことをテーマにしています。現場の人が仕事を終えてからでも来られるように、火曜日の夜に連続22回という形で開催されています。講座名のやや古めかしい感じからうかがい知れるように、私が担当するようになってから15年、開講からは40年以上を数えています。

私が働いている15年の間で、研修を取り巻く状況は大きく変わりました。平日の夜に開講している講座は、なかなか参加が難しいという声も多くなりました。同じ曜日の同じ時間に連続して参加するもの困難になり、土日に短期集中で学んで頂くスタイルに移行した講座も多くあります。

そんな中、「治療教育講座」は講座名も講座のスタイルも変更しないまま、しぶとく続いてきました。このマガジンと同じで、続いているものにこそ生じる意味があるとするのであれば、治療教育講座も続いている意味を考える価値があるかもしれません。最近では、児童発達支援事業所や放課後デイサービスなど、新設の事業所からの参加者も見受けられるようになりました。一方で、老舗の機関、ベテランの参加者もあり、参加者はいつも幅広い年齢、幅広い職域に渡ります。「発達障害」に対する関心の高まりをはじめ、発達支援の現場にも、社会や制度の変化は大きな影響を与えてきました。その変化はとらえながら、それでも時流に左右されるだけでな

く、いつの時代も変わることなく大切だと思えることを、じんわりと続けていきたいと思っています。



馬渡徳子

飽きっぽい私が、はまっていることがある。

一日二回の五分間瞑想。

始めは、邪念で歯がいかした。

けれど、慣れてくると、頭が切り替えられ、目がすっきりすることがわかった。心地良いと感じる匂いにも気付けるようになった。

あれは、三年前の秋、早稲一男さんのワークショップの演習で、「頭のとっぺんから足先まで、神経を集中しながら、目をつぶって、黙ってCTスキャンをする」という体験をした。

気になる箇所、スキャンがひっかかるということに気付けた。

二年前の秋、過労で救急搬送された時、見舞いに駆けつけた視覚障がいのある鍼灸師の友人が、「週に一回でもいいから、自分の体の声に耳を傾けなさい」と助言してくれた。

昨年の秋、不思議なレストラン・クッキングハウスの松浦幸子さんのワークショップで、瞑想法を体験した。

開催地の石川県珠洲市で購入された珠洲焼きの「おりん」を、始めと終わりの合図で鳴らされ、皆でその音色に聴き入った。

今年の秋、触法ケースの支援をされているご住職を、認知症カフェにお招きして、皆で瞑想を体験したところ、大好評で、前半と後半の切り替え場面で以後も継続している。静の時間をつくると、後半かえって話が弾み、飲み物も美味しく感じるの不思議だ。

病気療養中の遠方の友人に、「朝晩同じ時間に瞑想をしようぜ」と誘うと、こんな

素敵な返事が来た。

「うん。心一つに、世界の平和を祈ろうよ。」

すると、私の父の言葉も思い出した。

「苦しい時こそ、『逆に』、誰かのために祈りなさい。」

「迷走」ばかりしている政治家よ、

喝!!!

竹中尚文

前回に続いて、パスタを紹介する。今回はカルボナーラである。ベーコンと卵のスパゲッティだ。かつて私は、ベーコンではなく、パンチェッタを使っていた。神戸のイタリア料理店のシェフが「スモークガデキルノダツタラ、ベーコンヲツカッタハウガイイ」とアドバイスをくれた。まったくその通りだと思ったので、今は自分でスモークして、ベーコンを作っている。チーズは梅田でチーズを売っていた人に、パルメジャーノよりペコリーノを使った方がいいというアドバイスももらった。

【作り方】準備するものは、スパゲッティ麺、ベーコン、卵、ペコリーノ。①好みの量のスパゲッティを準備する。ベーコンも好みの量で準備するが、多いと塩味がつよくなる。②ベーコンを適当に切る。③ペコリーノチーズをすりおろす。事前にフードプロセッサーでまとめてすりおろして、冷凍保存しておいてもいい。④私は、スパゲッティ100gに対して、ペコリーノ15gと卵黄1個の割合で使う。卵4個程使うときは、その日の気分で全卵1個と卵黄3個にしたりする。⑤ボールで卵とチーズをよくかき混ぜる。⑥スパゲッティ麺を茹で始める。⑦続いて、フライパンでベーコンを炒める。⑧スパゲッティ麺がアルデンテほんの少し手前で火を止める。⑨ここからがこの料理の醍醐味である。スパゲッティをベーコンのフライパンに入れる。火は止めるか、最弱火にする。⑩卵とチーズを混ぜ合わせたものもフライパンに入れる。同時に粗挽きコショウを入れて、フライパンの中ですべてを混ぜ合わせる。表面全体にてりが出てきたら火を止める。この⑨を⑩はすべてタイミングである。いい材料と手間を惜しまず準備しても、このタイミングを間違えれば、失敗である。これが素人料理の面白さである。プロは必ず成功する。私

は成功もすれば失敗もする。これが料理の面白さである。

料理中のバックに流す曲は the Chieftains の Voice of Ages。アップテンポのアイランド音楽のバンドである。アイランド音楽を代表するバンドだから、アルバム数の多い。わたしは、この Voice of Ages を気に入っている。楽しくなってきて、元気がでる。今、来日公演中であることを知らなかった(残念)。

【告知】 前回にお知らせをした私の本の出版が遅れている。9 月中に再校を言われていたが、まだ送ってこない。忘れていたわけではないのだそうだが、他に急ぐ仕事があるようだ。のんびりと待つしかない。お付き合い願いたい。

サウタツヤ

あろうことか、締め切りが10月25日だと思って、1ヶ月以上も前に原稿を提出してしまった。なんたる不覚。。。再発防止に努めたい。

秋は、学会シーズン。9月には日本心理学会、日本質的心理学会、日本パーソナリティ心理学会で主として指定討論を行った。ある方に「サウタツヤは今の日本の心理学界で、最も守備範囲が広いヒトのひとり」と紹介してもらった。確かに質的研究、心理学史、プラセボ、重回帰分析、頼まれたら断らないので範囲は広がって当然か。もっとも、守備範囲が広いけれど、エラーも多い、という現実もある。

そして、12/8から総合心理学部の校務(交換留学制度作り)のため、デンマーク・オールボー大学/コペンハーゲン大学に出張。もちろん、研究交流もするけれど、職員の方と一緒に校務海外出張は初めて。

ちなみに、デンマーク・オールボー大学はPBLのメッカの一つで、本誌に好評連載中の山口洋典立命館大学准教授がサバティカルで滞在中。

果たして学生の留学制度作りなど校務はうまくいくのか??? 刮目して待て!

川崎二三彦

時は移り...

横浜で仕事をできるようになって10年余、この数年は、毎週毎週新幹線で京都の自

宅から通勤しているのだが、京都駅の混雑が年々深刻になってきた。かつて新幹線の駅構内は広々としていて、修学旅行生が集団で待機するために拵えたようなものだと考えていたのだが、昨今は、時を問わず、季節も問わず混み合っている。

混雑は新幹線に限らない。

「この<快足>は伏見稲荷には停車しません。隣の<普通>にご乗車ください!」

よく利用する JR 奈良線ホームでは、この前もホームいっぱい広がる乗客相手に、駅係員が根限りの声を出して呼びかけていた。奈良線沿線の宇治には、観光名所の平等院や世界遺産で国宝にも指定されている宇治上神社などがあるが、こちらも例に漏れず客があふれるようになり、外国人観光客もいない日はないと言っている。おかげで一時間古鳥が鳴いていた宇治橋商店街も、通る度に新しい店ができ、賑わいを見せている。

ところがある日のお昼どき、12 時前になるというのに、商店街の端にある和食の店が閉まっている。不思議に思っただアを見たら、なんと「本日は完売しました」の張り紙。



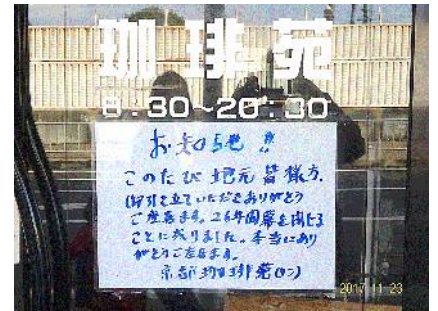
平等院前には、いつのまにか宇治市唯一のスタバも開店し、つい最近も JR 宇治駅前に伊藤久右衛門の店舗が誕生、開店早々列をなして買い物を楽しむ客でいっぱいになった。

話変わって、同じ宇治市の近鉄大久保駅。急行停車駅で、私が長年勤務した宇治児童相談所の最寄り駅だ。高架下に改札があって、その並びには書店やレンタルショップ、スーパーやパチンコ店、何店舗かのレストランやラーメン店が並んでいた。その中で、私が最もよく利用していたのが、喫茶「珈琲苑」である。

この喫茶店は、地の利用もあって都合よ

く、ここで原稿の校正をしたり、当座の予定を立てたり、関連書籍に目を通したり、さながら私の移動書齋ともいうべき役割を果たしてくれていたのである。マスターは、ちょくちょく替わるアルバイト店員に、接客の仕方だとか食器の片付け方その他、何かと注文をつけていたけれど、一國一城の主になった満足感が、その口ぶりに表れていた。店員はありがた迷惑だろうと余計な心配もしたものだが、「我が城」を存分に楽しみ、頑張っているのが傍目にもわかった。

ところがある日のお昼どき、宇治児童相談所に用務があって、久しぶりにこの喫茶店で軽食を取ることにしたのだが、12 時前になるというのに、店が閉まっている。不思議に思っただアを見たら、なんと「26 年間の幕を閉じることになりました」の張り紙。



よく読むと、文章もいささか乱れがちで、文字も少し滲んでいたが、いつの間にか廃業していたのである。

びっくりして、今度は建物の入口にまわって中に入ろうとしたら、ドアがうんともすんとも動かない。入口自体に鍵がかかって開けられないのである。つまりは、本屋もレンタルショップも喫茶店も、何もかもが順次閉店して行って、ついには高架下の北側半分が営業を停止し、残るは南半分のスーパーぐらいになっていたのだった。

私が勤めていた頃は、宇治市の中では JR 宇治駅付近よりも近鉄大久保駅の方が盛んな印象だったが、時代が移り、私たちが時間外勤務のために夜食を買っていた児童相談所すぐ近くのスーパーも閉鎖された。

「スーパーに連れて行ってやる」

こんな約束をして車に子どもを乗せ、途中で「その前に児童相談所にも寄るからね」などと子どもを騙して来所した親もい

たが、そんな策略も今では使いようがない。

十年一昔というけれど、宇治児童相談所を離れて10年余。現在の所長は、私が係長をしていた時に新人児童福祉司として赴任してきた人だ。人も街も動く、これまでも、これからも。(2017/11/30記)

荒木晃子

大好きな叔母が天に召された。

亡くなった母の12人兄弟姉妹の末妹で、最も母似の、美しく笑顔の素敵な憧れの女性だった。叔母は、国内初の開業カウンセリングルームを開設した臨床心理士だ。晩年は、山口県の大学の教壇に車椅子で立っていたと聞く。その昔、高校を卒業した叔母が、(私の)両親の新婚所帯に身を寄せ、働きながら大学進学を目指していたのは、今から60年程前のことだ。働きながら猛勉強し学費を貯め、受験に臨んだ結果、見事、独学で上智大学に入学を果たしたという。九州で両親と暮らした時期に丁度私が生まれ、叔母は生まれただばかりの姪のおしめを変えたり、添い寝をしたりと、我が子のように可愛がってくれたと母から聞いた。

先日、生殖医学会で下関に出向く機会があり、ついに叔母が眠る市内の教会へ足を運ぶことができた。お礼と共にお別れの言葉を告げるつもりが、「次に会ったらこんなことを話そう」と思っていたことを、クリスチャンネームのついた叔母の写真にいつしか語り続けていた。昇天した現在も、私を支え続けていてくれる。叔母の名は、武安よしえ。私の自慢の叔母だった。合掌

鶴谷主一

もうすぐ幼稚園の音楽会だ。このマガジンがアップされる頃には終わってホツトしていると思うけど、各クラスの進捗状況やオープニング、エンディング、そして音楽会の主旨を保護者に伝えるアイテム作りや、みどころパンフ作りなど、やることが

満載だ。

前回のマガジンで、音楽を楽しむと書いたが、実際にやってみるとスキルを身につけさせることと楽しむことの両立の難しさを感じ、毎度のことながら悩んだり迷ったり、そして工夫して乗り切っていくというプロセスを経て本番を迎える。悩みたくないなあーと思ったときに停滞するときなのかもしれない。

原 町 幼 稚 園

<http://www.haramachi-ki.jp>

メール office@haramachi-ki.jp

ツイッター haramachikinder

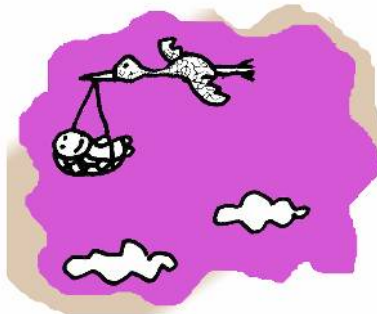
木村晃子

締め切りぎりぎりに原稿を書いている。毎日があつという間に終わり、積み残しだけがが増えていく。疲労感いっぱい。

北海道はすっかり冬だ。春が来るまで、ひたすら耐える雪との戦いだ。

北海道で生まれ育った長男。あの財政破綻した夕張で働くようになって3年が過ぎた。たくさんのことを経験し、また新たな道へ挑戦したようだ。この冬空を飛び終えて、しばらく雪のない地域で新たな仕事に挑戦するらしい。どんどん離れるわが子には、ただただ、元気であれ、と思いたい。人生は1回きり。自分の思うように生きたい。

北海道 ケアマネジャー



三嶋 あゆみ

#くいもんみんな小さくなってませんか

日本のハッシュタグが少し前に流行ってました。

企業が「値上げできないから内容量を減らす」ほど、庶民のくらしは切羽詰まっているのに、政府はまだ、消費税10%を諦めていないことに驚きます。

先の見えない不景気で、招き猫もお疲れさま！

乾明紀

今号の周旋家日記は、休載いたしました。これまで、幾度となく締切日を融通してもらいながら続けてきましたが、今回は踏ん張りが利きませんでした。次号では復活したいと思います。

高垣愉佳

今回は、諸事情でお休みさせていただいて、次号で「おじゃまします」は最終号にしたいと思います。連載をするというのは、自身のやってきた事を振り返る作業でもあります。振り返り、文章にして発信したいと思えるほど仕事を楽しめるというのはありがたいことだなと思います。月日が流れてから文章化する上で、当時の自分とは異なる自分の視点が生まれていることを実感する今日この頃です。昔の自分を恥ずかしく思う事もあるのですが、現場の中で日々変化している自分を実感するのも悪くはないなと思います。様々な人に出会い、ケースに出会い、多くの書物を読み、常にリニューアルした自分で今日も同じ現場に立つ、それこそが臨床なんじゃないかと思う今日この頃です。